

たてごと

弘前学院大学
宗教部
宗主任
楊 尚眞

〒036-8577
弘前市稔町
13-1

七転び八起きの生き方

宗主任 楊 尚眞

旧約聖書の箴言24章16節には、「神に従う人は七度倒れても起き上がる」という聖句があります。この御言葉と似た日本の格言があります。今の時代にはあまり耳にすることのない格言ですが、「七転び八起き」という言葉は、人間の頑張りについて奮起を促しているもの。「七度倒れても、頑張ってもう一回起きる」という意味です。

世にはいつもどんな悲惨な状況に置かれても物事を前向きにとらえ、ポジティブな考えをもって立ち上がるかと頑張る人たちがいます。そして頑張る人は立ち上がりますが、頑張らない人、立ち上がることができないと思う人がいるのです。以前に「頑張らない」という言葉が社会に出回っていました。勿論、人の置かれた状況によつては「頑張らない」方が良い場合もあるでしょう。冷静に自分自身を見つめ、無理をせず、自分に合った生き方を見つけないならひたむきに生きて行くこともできるのです。しかし問題は、頑張ることができないのに、頑張れば何かを達成できるのに、い

つもネガティブな考えをもって頑張りすぎにすぎない、すぐにあきらめたりすることなのです。聖書が示している生き方は、神を信頼する信仰をもって生きる生き方ですが、信仰的な生き方とは基本的にポジティブな考えをもつ生き方です。信仰的な生き方にはネガティブな考えはありません。さて、この箴言の言葉の「七たび」というのは、七という回数をいうのではなく、ヘブライ語の七は完全を意味しますから「七たび倒れる」とは、完全なノックダウンで、人間の頑張りでも、奮起でも、もう二度と再び立ち上がれないことを意味しているのです。しかし箴言は「神に従う人は七度倒れても起き上がる」といっています。これはどういふことでしょうか。これがこの「七転び八起き」についての箴

言の言葉と日本の格言と異なるところです。日本の格言の「七転び八起き」は、人間の頑張りについて奮起を促すものですが、その人間の頑張りも必要なものですが、人間の頑張りとは、無限ではなく限界があるので。しかし神を信じ、神により頼む人、つまりエネルギーの根源は、限界をもつ人間の頑張りにあるのではなく、限界のない全知全能なる神につながっている者、このような人は、人間の頑張りでは二度と立ち上がれないほど、完全に打ちのめされても、神の力によつてまた立ち上がることができるというのです。詩編84章5節「6節には「いかに幸いなことでしょう。あなたによつて勇気を出し、心に広い道を見ている人は、嘆きの谷を通るときも、そこを泉とするでしょう。雨も降り、祝福で覆ってくれるでしょう」と語つ

ています。パール・バックは『母の肖像』という本の中で、自分の母メアリーについて、こんなことを言っています。母メアリーは、新婚22歳の花嫁として、当時、まだ未開で生命の保証のない中国大陸へ伝道のために渡つて行きました。そこで七人の子供が生まれましたが、そのうち四人は、母の目の前で次々とその生命が奪われて行きました。母は相づく貧困、病苦、欠乏、孤立、非運、迫害といったさまざまの涙の谷を通りました。しかし驚くべきことに、子供たちにはそれが悲劇として映っていないのです。「母は多くない雑誌や本や、また自分の記憶から、さまざまなりズムや歌をさがし出しては、子供たちの生活に楽しみをみながら、また何年も同じ服を子供たちに着せながら、リボン一つを結ぶ、花一輪を衿元につけるといふ。そ

んな一寸した工夫で、いつも新調の服を身につけているように子供たちに感じさせたのです」と書いています。私たちの人生は、どんなことがあっても頑張つて起き上がる人生でなければなりません。

今年、大阪府北部地震や西日本豪雨や猛暑によって多くの方々が亡くなられ、被害に遭いました。この自然災害の被害によって多くの方々は、まだ、立ち上がれない状態にいるかもしれません。早く元の生活に回復することができるよう祈りたいと思います。しかし、「神に従う人は七度倒れても起き上がる」という御言葉が世に浸透することを願います。

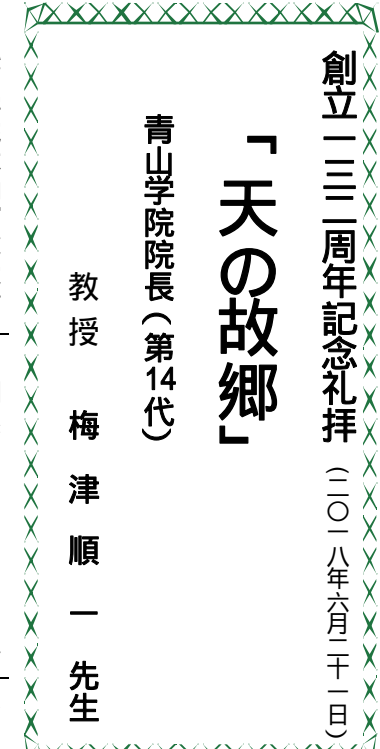
神を信頼し、御心に従う人生には敗北はなく、勝利のみです。その勝利が学業の上に、教職の上に、本学の発展の上にありますよ、お祈り致します。

創立一三三周年記念礼拝 (二〇一八年六月二十一日)

「天の故郷」

青山学院院長(第14代)

教授 梅津順一先生



の11章のあたりからアブラハムが登場し、歴史の話になります。創世記11章27節によると、アブラハムの父、テラは3人の子どもを含む家族とともにカルデアのウルという町に住んでいました。テラとその家族はカナン地方を目指してウルを出発し、ハラソという町に行きます。そしてハラソに滞在している時にテラは亡くなり、ハラソまで来ていたアブラハムにとつていくつかの選択肢がありました。ハラソに神の呼びかけ(召命)があったと聖書は記しています。あなたは生まれ故郷の父の家を離れて私の示す地に行きなさい。私はあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める祝福の源になるように。あなたを祝福する人を私は祝福し、あなた

を呪う者を私は呪う。地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る。このアブラハムの信仰(ヘブライ人への手紙11章8節から)によって、アブラハムは自分の財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、それに従い、行き先も知らずに出発したのですと書かれています。キリスト教の信仰は神の呼びかけ(召命)に応えるもので、それに対してアブラハムは神の言葉にしたがって旅立ったわけです。神の呼びかけ(召命)はどのようなも

弘前学院は函館遺愛女学校の分校として出発し、その函館遺愛はアメリカのキリスト教プロテスタントのメソジスト派の宣教師によつて作られた学校です。彼らはキリスト教を伝道するために教会や学校を建てたわけですが、東京、横浜に建てた学校が現在には青山学院であり、長崎に建てた学校が活水学院であり、函館に建てた学校が函館遺愛となり、弘前学院となっているわけです。その意味で青山学院と弘前学院は古くから兄弟姉妹の関係である言えます。また弘前学院と青山学院は本多庸一先生を通して親し

い関係にありました。本多先生は明治期の青山学院で長く院長の地位にあり、多くの人に慕われたかたです。また第6代院長の阿部義宗先生、第7代院長の笹森順造先生は弘前出身のかたで、弘前学院との関わりも深い先生でもあり、その意味で青山学院は長く弘前との深いつながりがあるわけです。

今日はキリスト教信仰の原点ともいえるべき、アブラハムの信仰を通して学んでいきたいと思えます。新約聖書のヘブライ人への手紙11章8〜16節を読んでいただきましたが、旧約聖書では創世記

の11章のあたりからアブラハムが登場し、歴史の話になります。創世記11章27節によると、アブラハムの父、テラは3人の子どもを含む家族とともにカルデアのウルという町に住んでいました。テラとその家族はカナン地方を目指してウルを出発し、ハラソという町に行きます。そしてハラソに滞在している時にテラは亡くなり、ハラソまで来ていたアブラハムにとつていくつかの選択肢がありました。ハラソに神の呼びかけ(召命)があったと聖書は記しています。あなたは生まれ故郷の父の家を離れて私の示す地に行きなさい。私はあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める祝福の源になるように。あなたを祝福する人を私は祝福し、あなた



のであるか。召命があつてそれにしたがつて出発すること、それがキリスト教信仰の基本です。

カナンの地方に向かつて後の生活はというと、アブラハムはあなたの子孫にカナン地方の土地を与えると約束されたわけですが、現実にはその土地の人がいて、アブラハムの土地にはなりません。つまりアブラハムには神様から約束された土地があつたにも関わらず、現実にはその日が来るのを待ちつつ過ごすしかありませんでした。約束は示されている。しかし実現はまだ先にある。そのような状態です。そうした中で、アブラハムには様々な困難が押し寄せました。アブラハムにとつて最大の問題は自分には子どもがいらないことです。しかしそうした現実の中で、アブラハムは神の呼びかけ、神の約束の言葉を信じて、一族とともに家畜を率いてカナ

ンの地を移動していたわけです。

アブラハム一族は、父テラが生きている時代から、したがって神様の明確な呼びかけがある以前からカナン地方に向かつて出発していました。では、どうしてカナン地方を目指したのか。アブラハムの出身地カルフデアというのは当時のメソポタミア文明の中心地で、アブラハム一族はその文明の中心地の行く末に不安を感じていたのかもしれない。文明と言いつつ、様々な問題に直面していた現実には不安を感じていたかもしれない。ヘブライ人への手紙では、アブラハムは神が設計者であり、建設者である堅固な土台を持つ都を待望していたとあります。それが実現するカナンの地は神の約束の地です。創世記のアブラハムに対する神の呼びかけには、不思議な表現があります。あなたを祝福する人を私は

祝福し、あなたを呪う者を私は呪う。地上の氏族はすべてあなたによつて祝福に入る。つまり、アブラハム一族が新しい土地で平安に暮らせるという意味だけではなく、アブラハムの生き方によつて他の種族も繁栄する、人類が平和に暮らせるといふものです。ですから、神様はアブラハムに与えた約束の地は人類全体に広がる約束の地でもありました。その約束の地のことをヘブライ人への手紙では天の故郷と述べています。故郷というのは日本人にとつて理解しやすい親しみやすい言葉で、「故郷」という歌があります。では聖書のいう天の故郷はどうでしょう。か。天の故郷は私たちの後ろではなく、私たちの前、将来にあるものです。天の故郷は神様の呼びかけにこたへて出発したものが到達するところ、約束の地です。この地球上では故郷をとにもする様々な

民族がいます。世界の国々世界の民族がそこを故郷とすることができ、それを実現するところが天の故郷です。アブラハムが目指した約束の地は、そのような意味で天の故郷と言えます。創世記の15章にはなかなか約束が実現しないと不安に思っていたアブラハムに神が示しを与えた場面が記されています。自分の家を継ぐのは自分の子ではないとアブラハムは申しています。しかし神はそうではない、あなたの子があなたの後を継ぐと約束をしています。アブラハムを夜、外に連れ出してこう言いました。天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。あなたの子孫はこのようになること示されました。一人の子どもさえ生まれぬのに、あなたの子孫は空の星の数ほどになることはとても信じられない。しかし聖書は、アブラハムは主を信

じて、主はそれを彼の義と認められたと伝えていきます。神の約束の言葉にしたがつて出発したアブラハムの信仰はここでも揺らぐことなく、約束の実現への旅を続けることになりました。アブラハムはユダヤ人にとつて信仰の父であることは言うまでもありませんが、イスラム教にとつても信仰の父です。したがって、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教はアブラハムの宗教と言われています。現在、このアブラハムの宗教を受け入れる人は、間違いなくアブラハムが見た満点の空の星よりも多くいるということになります。その意味で神の約束は実現したと言えます。しかし、多くの人が平和と愛に包まれる理想の地、約束の地が実現したかといえはそうではありません。各宗教の間には激しい対立や深刻な憎悪もあります。アブラハムの信仰を通じた世界



平和への道は実現しているわけではなく、それを受け継ぐ人々は今日もまた約束の地への旅を続けているといえます。

現在、日本のキリスト教学校ではかつてのような宣教師のかたはいませんが、宣教師の信仰、希望や志を私もは受け継いでいかなければならないと思います。アブラハムや宣教師の信仰を受け継いで、約束の地、天の故郷を目指して歩みを続けていくわけです。今日はアブラハムの信仰についてお話ししましたが、それは皆さんが弘前から出

発しなさいと言いたかったのではありません。皆さんの多くは弘前に生まれ、弘前で育つ、弘前で活躍する、それは大変頼もしいことで応援したいと思えます。私が言う天の故郷というのは、皆さんが故郷を離れるという意味では必ずしもありません。故郷で活躍する皆さんに大事な一つの視点を話したかったわけです。懐かしい故郷というと、私たちは故郷の古いものに目がいき、もちろん故郷の古い歴史、地域の成り立ち、古い習慣、古い信仰への敬意を持つことは大切なことです。しかし伝統を尊重することは、しばしば伝統主義ができることでもあります。伝統がきたりになり、身動きできないようにもなりかねません。天の故郷を目指すとは、その故郷への思いをさらに深め、将来へ向かって発展させることです。故郷を過去の基準で考えるのではな

く、将来の可能性としてということですが、故郷は弘前の人たちだけの故郷ではなく、多くの人々を呼び込み発展させ故郷にすることです。現在、日本人の故郷、地域社会は様々な問題に直面しています。グローバル化は日本経済のあり方を大きく変えつつあります。戦後日本の経済成長の目的が成り立たなくなってきた。少子高齢化から地方消滅という言葉も行き交っています。現在の日本の故郷は歴史上、最大の危機を迎えているといえます。その故郷には天の故郷を目指すことが必要ではないかと思えます。神様は私たちにも約束の地を目指し、天の故郷を目指して歩むことを呼びかけているのではないのでしょうか。

(文責 宇田宗弘)

教職員研修会の報告

「丘の上の町、丘の上の学校」

青山学院 第14代院長

梅津順一 先生

私も青山学院と弘前学院は、共にメソジスト教会をその母体とし、その創始において本多庸一のご尽力を受けたものとして、姉妹という関係にあります。

この、流れの中で、日本においても同様に、女子小学校、耕教学舎、美會神学校の三つの学校が明治初期に建てられ、その三つをルートとして青山学院が生まれました。これらの学校を通して、日本社会にキリスト教的生き方を教え、文明化するために、いわば「丘の上の学校」を通して、「世の光」を日本に輝かせるために、宣教師たちが働かれたのです。

私たちの母体である、メソジスト教会は、18世紀イギリスの学生の創始による信仰運動から始まり、19世紀にはアメリカにも広く広まっていた教会です。この運動が、特にアメリカでは、教会を立て学校を作り病院や福祉施設を建設し、地域社会を作る働きをしてまわりました。こうしてできた福音によるコミュニケーション、それが全アメリカをおおい、アメリカを「世の光」たる「丘の上

この、明治の日本のために千里の波瀾を超え、また日本のために涙を流して祈る宣教師の姿に心動かされた方こそ、本多

庸一先生でありました。やがて、先生はイング牧師とともに弘前に帰り、教会を起し、雑誌を刊行し、博覧会を開き、弘前を「丘の上の町」にしようとした。その中で、弘前学院が生まれ、唯に良家の子女のみならず、市井の子女、子守の女子らをも、その学徒として、女性の自立へも参与していききました。また、様々な文学の香りを町にもたらし、弘前を「丘の上の町」とする働きを行ってきたのです。つまり、この学校はその中心となる「丘の上の学校」と言えるのではないのでしょうか。

戦後特に、こうした「丘の上の学校」である各種のミッションスクールを通して、キリスト教文化は広まり、現在に至っては、クリスマスを初めとして日本人の生活の隅々にまで広がっています。しかし、そのことが教会を、またミッションスクー

ルを、特に繁栄させているかと言うと、そんなことはない現状があり、我々は、こうした点を深く考えていかねばならないと思います。

また、日本社会もグローバル化の荒波と少子化を始めとした、激動の中で、非常な困難に直面していると言えます。特に、少子化については、生涯未婚率という恐ろしい言葉があり、しかも全男性の1/4、女性でも1/8の人が生

涯にわたって一度も結婚したことがない状態であるのです。

このような中であって、子を産み育てることの大切さ、特に家庭生活の楽しさ・重要性を伝える意味からも、我々ミッションスクールが、世の光として、「丘の上の学校」として、大切な使命を担っていることであり、そのことを自覚することが、私たちに求められているのではないのでしょうか。

(文責 柘植秀通)

「アイマリゼーションの源流」

三年生リトリート
二〇一八年五月三日

社会福祉法人 カナンの園
理事長 及川 忠人 先生

5月31日(木)に、本学の礼拝堂において3年生リトリートが行われた。今年度は一般財団法人みちのく愛隣協会東八幡平病院病院長で、社会福祉法人カナンの園理事長の及川忠人先生をお迎えして、ノーマリゼーション(Ormalization)の原点とい

う題名でご講演頂いた。岩手県大船渡市の出身で、父親は高等学校の教員をしていた。父親は教員の傍ら、更生保護司として復職支援に従事し、奉仕活動をしていた。恵まれない境遇の方を支援する父親の姿に、リハビリテーションの本質に近い姿を感じた。

高校時代には、実家の後ろに日本キリスト教団大船渡教会が建てられ、新任伝道師として中条和哉先生夫妻が赴任された。当時、英語で聖書を読む会「Bible Class」に参加し、English Bibleを学ぶ機会となった。Bible Classには高校の英語の先生も参加しており、その先生からシユバイツァー博士がアフリカへ行き、ジャングルの医師になる決断のことが書かれた著作である。「我が思想と生活よ」を教えられ深い感銘を受けた。医師を将来の職業として進むことを意識し始めたのは、このシユ

バイツァー博士の著作「我が思想と生活よ」を読んだことがきっかけとなった。

岩手医大医学部教養部の医学進学課程の時には、夏休みに実家に帰ると、中条先生のご指導でラテン語とギリシャ語の基本文法について学ぶことができた。また聖書を読み、ルターの『キリスト者の自由』や三木清の『パスカルにおける人間の研究』、そして神谷美恵子の名著『生きがいについて』等を読みながら、自分の信仰や人生のあり方を学ぶことができた。父は熱心な仏教徒で、浄土真宗の親鸞の教えの大切さを教えてくれた。小生は三男であり、Bible Classで聖書を学びキリスト教を自分の宗教としたいことを話し、父親に許しを得て医学部4年生の春に郷里の大船渡キリスト教会で中条和哉牧師から洗礼を受けた。県立病院で働く医師が「台湾」医療奉仕

活動への参加から「キリスト者医科連盟」の存在を知った。キリスト者医科連盟の奉仕活動の傍ら、同連盟の総会に出席し、「命とは何か、癒しとは何か」等に医療の基本的な学びの場を与えられ感謝した。医学部6年の夏、日韓交流セミナーに参加し、韓国の医学生との交流の時を与えられた。ネパールに日本キリスト教海外医療協力会より派遣された岩村昇先生の生き方に感動を覚え、伊藤邦幸先生のネパールでの医療活動に共鳴した。海外医療協力に興味をもち、医師の資格を得た後に、日本・台湾キリスト者医科連盟合同・国際奉仕活動に従事する機会が与えられた。

大学卒業後、母校の脳神経外科教室の大学院生として進学し、教室の脳循環班の中で、当時アイソトープ（同位体・化学的性質は同じで、同じ原子番号を持つが、質量数が異なる元素）を用いた局所脳循環測定の研究に従事し、外傷性無動無言症の脳循環について臨床研究を行うことになった。さらに当時の局所脳循環の世界的権威であったデンマーク・コペンハーゲンのBispebjerg HospitalのJessen教授の下で最先端の254チャンネル局所脳血流測定装置を用いた最先端の臨床研究にも参加した。福祉先進国であったデンマークの学問・科学だけでなく、その文化と歴史を学ぶ機会が与えられた。母校の脳神経外科教室に10年在籍して、東八幡平病院のリハビリテーション部長として赴任した。

我々は北欧から何を学ぶべきか。北欧の福祉活動の現状と、その先進的状況は一朝一夕に出来たものではなく、歴史的・文化的背景があることを学ぶ必要がある。デンマークのバンクミケルセンはノーマリゼーションの本質を、キリスト教を基盤とした「人間愛」にバイキングの伝統である「連携(Solidarity)」が加えられて、知的障害を持つ人々をごく普通の生活にもどすことを目指したものである。ノーマリゼーションの意味とその目指すところを学ぶには、ノーマリゼーションの提唱者であったバンクミケルセンの生き方とその時代背景を学び理解することが最も早く学べる方法であると思われる。元弘前学院大学教授社会福祉学部長、花村春樹先生の著書『ノーマリゼーションの父 N・E・バンクミケルセン』、ミネルヴァ書房一九九四に、ノーマリゼーションの理念・背景、N・E・バンクミケルセンの生涯、デンマークの社会的背景であるデンマークの風土とその特質、バイキングの活動、キリスト教の伝来、ドイツの中立の破棄、レジスタンス活動の始まり、ナチスの

敗退などが書かれている。厚生労働省では「ノーマリゼーション」という表記を使い、これにほぼ統一してきたようだが、*ornalysere vo normalisere* の名詞形 *Normalisering* (ノーマリゼリング) をバンクミケルセンも英語でノーマリゼーションと発音していたことから、「ノーマリゼーション」と発音に忠実に表記している。「ノーマリゼーション」の概念は机上で論議されるような、高尚なものでもなんでもなく、ごく当たり前の人間のあり方で、日常生活の心構えに近い。「ノーマリゼーション」「社会的公平」「障害者や老人の生活条件を、障害を持たない人たちの生活条件に可能な限り近づける」の考えを実践の場で理解される必要がある。そのため国民全員が自分たちの生活が如何にあるべきかを真剣に考え取り組むべき時である。

若い学生諸君のために。若い人はどうしておのが道を清く保つことがでるのでしようか。み言葉に従ってそれを守るよりほかにありません（詩篇119編9）。

しかしわたしはあなたのおきてを喜びます。苦しみに会ったことはわたしに良い事です。これによってわたしはあなたのおきてを学ぶことができました。あなたの口のおきては、わたしのためには幾千の金銀貨幣にもまさるのです（詩篇119編70〜72）。

（文責 宇田宗弘）



礼拝感想文

阿保邦弘理事長奨励

「第14代校長 M・

H・ラッセル先生」

を聞いて

社会福祉学部

社会福祉学科

一年 長谷川 夏鈴

私は本学に入学するまではキリスト教という宗教を知っていたが、詳しくどんなものなのかは知らなかった。そもそも、私はキリスト教を始め、様々な宗教に関しては何も興味がなく、どれもこれも名前だけ知っている程度だった。しかし、この大学に入学し毎週の礼拝と宗教学の授業を受けていくうちに、自分の中で少しずつ考えが変わり、もつとキリスト教について学んで見たいという思いが強くなっていった。前期の礼拝の中で私が一番印象に残っているも

のは7月19日の礼拝である。この礼拝では薫科夫妻によるチェロとピアノの演奏があった。チェロの重厚感漂う音とピアノの美しく伸びやかな音は体全体に響き、全身で音を感じることができた。この日の奨励は「第14代校長M・H・ラッセル先生」であった。彼女は母国で数々の素晴らしい名誉を得ていたにも関わらず、それらを捨て、周りの反対を押し切り日本へ来たというのとはものすごい決断であり、とても芯が強い女性なのだと感じた。当時の青山女学院の院長を務められた後、この弘前学院に着任した。その後14年間もの間この弘前学院の校長を務められたとき、ものすごく長い間この弘前の地で活躍をしていたのだと考えると、驚きと同時に尊敬の気持ち湧いてきた。異国の知らぬ土地で長く活躍するのはとても大変なことだっただろうと思

う。これはただ単に意思の強さだけでは乗り越えられるものではないと思っただ。誰もがついていきたいと思う彼女のその素晴らしい人柄があつてこそだと感じる。

それに、この当時の日本の背景を見てみると、指定されていた外国人の居留地が撤廃されたり、学校の宗教教育禁止となつたりなど決して平和なものではなかつたと思う。しかし、就任直後にも関わらず直ぐに学則を改正し組織規定を明確にするなどの彼女の決断力と行動力はすごいと思った。そして私にはもう一つ彼女を尊敬している点がある。それは夢を叶えるために、何事もひたむきに一生懸命努力するところだ。彼女には夢があつたという。それは広くて大きい講堂を「岩木ホール」と名付けることだった。私は夢には見ても「どうせ私には無理だ、実現させられるほどの力

はない」と思つてしまつた。しかし彼女は実現させた。私は彼女ほど全力で努力をした経験もないし絶対に叶えたいと思つた夢もなかつた。

高校三年生になり、すっかり現実をみて進路を考えた時私は、自分は本当は何がしたいのかを考えた。その時に出了た結論が社会福祉士、精神保健福祉士の資格を取得し、困っている人の未来を明るく楽しく素晴らしいものにしたいたいことだった。この時に始めて私は絶対に叶えたいと思える夢を見つけることができた。だからこそ私は自分の夢を追い、叶えるための努力を惜しまなかつた彼女の心を心の底から尊敬し目標としたいと思つた。ひとつのものに対して愚痴もこぼさずストイックに励む姿は、私だけではなく多くの人々が見習い、彼女から一番学ばべきことだと思つた。それが夢の実現、そして成功に繋が

ると思つているからだ。今回この礼拝で私は多くのことを学び、また多くのものを得ることができた。彼女のように努力し、一つの事にまっすぐひた向きに向き合つていく姿勢、そして誰からも信頼され必要とされる人間である事、これはこれからの大学生活、その先の人生を生きていく上で一人の人間として必要不可欠なものだと思う。だから私は、彼女のまっすぐでストイックで純粹な面、そして誰からも信頼され愛される彼女の人柄を見習つて、これから生きて行こうと思う。そして、努力を惜しまず必ず自分の夢を実現させ、彼女のように誰からも信頼され頼られる人間になりたい。すぐに彼女のようにな人間になるのは難しいと思うが、彼女のようになるまでの努力の過程でも、多くのことを学ぶことができると思つている。

礼拝感想文

叶岡利忠学長奨励

「こころの健康、
こころの不健康」
を聞いて

看護学部 看護学学科

一年 鎌田 海沙希

まず健康とは何か、定義としては、身体的・精神的・社会的に良好な状態で、単に病気や虚弱ではないとされている。健康は、からだのことだけではなく、こころや社会の面でも良好である状態なのだ。週報で「あなたは健康ですか」と問われると、私は今、現在、健康だと言えるだろうかという疑問が浮かぶ。奨励の題のようにこころの健康を考えたとき、からだは健康だが、こころは健康だと断言できないと思う。奨励では、年に数度の健康診断を受け、その結果を貰い、いわゆる正

常値の範囲を外れ何らかの所見がある人たちは、なんと6割以上いると述べられている。健康診断を受けてはじめて分かる情報があるということは、それまではわからぬまま、からだは健康の状態であるかと錯覚していることだ。また、健康の定義に加えて、今ではスピリチュアルという条件が加えられている、スピリチュアルとは、和訳すると霊的なもの、精霊なるものなどと訳されるが、日本語ではなくそのままスピリチュアルとして使われている。さて、ここで健康と不健康を直線上にならべてみると、健康と不健康(病気)の間にははつきりとした線引きをすることは出来ないだろう。こころについて考えても同様にはつきりとした線引きをすることは難しい。しかし、からだの健康は種々の検査などである程度は知ることができ、こころの健康はなかなか

判断することはできない。自分自身で健康だと思っていて、実際にそれは健康ではないのかもしれない。さまざまな心理検査もあるが、それは一種の補助的な手段にすぎないのである。何らかの原因でこころの働きのバランスが崩れるとからだの健康にも影響を及ぼす可能性があると思う。実際に私も、気分が落ちこんでいるときや考え事が多いときは、心なしか、からだが重くなっている気になってしまう。小学校からやっていたバスケットボールでは、自分自身で思い通りにいかないことやたくさん怒られてしまった日はたくさん思い悩み、食欲すらもなくなってしまうことがあった。そのようなことがあると、こころの不健康から気分が落ち込んでしまいがちだが、重く感じ、また、食欲が出ないせいで栄養不足になり、からだの不健康につながって

しまうのだ。からだの健康とこころの健康を両立することはなかなか難しい。毎日良いことばかりあるわけでもなく、悪いことばかりあるわけでもない。こころの健康の働きのバランスが少しでも崩れてしまうと、からだの健康にも影響してしまう。逆に、からだの健康のバランスが崩れてしまう。こころの健康はどうなるのか。風邪をひいた場合、もしくは悪くて悪性新生物が現れてしまった場合で考えてみる。風邪の場合は自分自身にとつて悪性新生物に比べれば重大なことではない軽度のからだの不健康であるが、なぜか気持ち弱気になってしまう。それに比べて風邪に比べて重度な悪性新生物だと治そう、大丈夫などと前向きな考えになることが多い。

人間は極度な状態ほど頑張ろうとする生き物なのだと思う。私は、からだの健康・不健康とこころの健康・不健康が比例しているわけではないと考える。からだの健康とこころの健康を両立するためにどうすればよいのかはまだ分からないが、こころが健康ではないとからだに影響することを考えることができたので、これから人を支える立場の看護師として患者さんのからだの健康をサポートすると共に、患者さんにも寄り添いこころをサポートもできるように今回の奨励をいかしていきたいと思った。また、これまで健康に関するお話だけではなく、キリスト教に関してお話を礼拝で聞き、これまでキリストに関わったことはなかったが、今まで信じられてきたイエスの考えや教えを聞くことができたと共に主の祈りや賛美を経験することができた。これからは、キリスト教概論での学びや大学礼拝の説教や教えを胸に生活していきたい。

礼拝感想文

水田賢次牧師説教

「鷲のように翼をはって」を聞いて

文学部

日本語・日本文学科

一年 榎引日向

今回の礼拝では、単立森岡チャペルの水田賢次牧師が説教をしてくださいました。壇上に立ってギターを取り出したときにはびっくりしました。それよりももっとびっくりしたのは、ギターで弾き語りをはじめたときでした。水田牧師が弾き語りをした曲は「翼をください」でした。かなり有名な曲で、音楽の教科書にも載っている歌です。卒業式で歌うことも多いです。

なぜ水田牧師が「翼をください」を歌ったのか。今回の説教の題は「鷲のように翼を張って」でし

た。

水田牧師は、自分の体験を踏まえてお話をしてくださいました。過去の自分は引つ込み思案なほうだったが、歌手になることを目指していた。キリスト教に出会ったことで変わったと語っていました。キリスト教との出会いが、かつての水田牧師の翼を広げるきっかけになったということでしょう。その出会いが、まさに鷲のように翼を張って自分がしたことのないうなことに一歩踏み出さずいいきつかけになる。今こうして礼拝で、みんなの前で弾き語りをするに至る始まりがキリスト教との出会いだということ、ますます聖書の教え、キリスト教の持つ力を感じます。この話から、ある一つの事柄との出会いが、人の考え方や進路方向を変えることがわかります。

引つ込み思案だった水田牧師が翼を広げたくかけがキリスト教との出会いにあったように、自分が変わるきっかけはいらぬところにあるのだと思います。人が自分の翼を広げて、新しい場所に飛び立つときは、いつでも不安が伴います。その不安をばねにして進んでいく推進力のようなものを与えるのは、例えば聖書の言葉や、誰かの言葉や、音楽や風景だったりします。大きな推進力ではなくても、落ち込んでいるときに励まされる。また頑張ろうと思える力を分けてもらえる。そういったものはちっぽけなものでも大切な力だと思えます。今回の礼拝を通して、改めて、キリスト教の持つ力と、運命的ともいえるものとの出会いについて考えることができました。

説教の中で水田牧師がおっしゃっていたことの中に鷲の寿命についての話ががありました。鷲の寿命は40年間ですが、そのあと二つの選択を迫られるそうです。一つは寿命で死ぬこと。もう一つは、自分で羽を抜き、くちばしを無くし、新しい翼とくちばしでまた40年間生きる道です。寿命でそのまま死ぬのと、新しい翼とくちばしで生きる。自分が鷲のように二つにうち一つを選べるなら、どちらを選ぶだろうと考えました。

考えた結果、自分は寿命で死ぬほうを選ぶだろうと漠然と思いました。もう少し頑張って新しい翼とくちばしで「第二の人生」へ翼を広げていけるのならそれも悪くはないです。だけど、人間として寿命が来るくらいまで生きていくのなら、もうそのころには自分の人生に対して、満足が得られている気がします。これについては人によって様々な違いはあると思います。人間の寿命という観点から述べずに言うならば、自分の情熱を向ける矛盾があれば、人はいつでも翼を広げていけると思えます。老若男女問わず、何かに打ち込む人は本当に楽しそうです。年齢的な衰えなどからできなくなるが増える人も、若いからこそやれることに制限がある人も、皆それぞれに打ち込めるものがあり、翼があります。それは人の生きる力、生きようとする力になります。

人間は、生きているのなら何回でも翼を広げられるし、やろうと思えば鷲のように翼を張って飛び立てるものだと思います。どんなこともできる力が人間には備わっている。だから思い切り飛び込んでみよう。そのようなメッセージが今回の礼拝には込められていると感じました。

礼拝説教感想文

井垣勝男牧師説教

「若者は幻を」を聴いて

文学部

英語・英米文学科

一年 安田 紫音

私は、教会に暦があることを聞いたことがなかった。教会の一年は、アドベントという待降節から始まるそう。そして、クリスマスを経て、イエス様の復活を祝うイースターがある。その復活から50日目ペンテコステ、つまり聖霊降臨日なのだ。ペンテコステまでがちょうど一年の半分である。なので、もう半年が過ぎてしまったということだ。半年が過ぎるということは、とても早いことだと思つた。高校に入学した時は、まだまだ先が長いと感じていたし、高校三年間は私にとって、少し長かったと感じている。

今となると、高校時代が昔のように思えてきたのである。そして、大学に入学してからもう半年が経ち、大学生活も慣れて、今は自分が大学生だということを実感している。これから、本格的に自分がしたいことについて専門的に学び、将来に向けて人生を歩むということをしなければならぬ。私は思うのである。それと同時に、大学生としての自覚を持っていきたい。宮沢賢治の詩について紹介をした。彼は、一八九三年生まれで、37歳という若さでこの世を去つたそう。童話作家でもあり、「雨ニモマケズ」などの有名な詩もある。彼の詩は、表現の雰囲気独特で、今でも読者が多い作家である。私は、宮沢賢治を詳しく知らなかった。少し彼の作品を見てみた。詩というものを日常生活で見る機会が無いので、どう読んで、どう感じればいいのか感

覚が掴めなかったが、それでも少し彼の作品に触れてみた。読んでみると、話に聞いたとおり、独特の雰囲気があり、選ぶ言葉が少しばかり棘のようだと感じた。明るいイメージではなく、重く、冷たいと感じた。言葉ひとつひとつが鋭く、胸に突き刺さるような感じがした。まだそんなに人生を生きていない私には、少し理解しがたい文だったが、いつか分かる時がくると信じて心にしまっておこうと思った。また、説教で紹介された「生徒諸君に寄せる」という詩も読んでみた。この作品は、一九二七年に「盛岡中学校校友会雑誌」への寄稿を求められて書いたものであるが、未完の詩であるそう。その中で、「ああ諸君はいま、この颯爽たる諸君の未来圏から吹いて来る透明な風を感じないのか」という一節があるが、私は、学生という立場からとて

も胸に響く詩だと感じた。未来から吹いてくる風を新しい風だと思ひ、大いなる夢を抱いて生きていこうと思つた。それから私が個人的にいいと思つた部分は、「むしろ諸君よ更にあらたな正しい時代をつくれ」である。われらの先祖がわれらに至るまですべての信仰や特性がただ誤解から生じたとなさえ見える、そんな時代からあらたな時代をつくって進んでいくというふうを感じた。やはり、とても独特な表現であると思つた。

私は、神様をあまり信じない人間だが、高校がキリスト教ということもあり、授業でも「聖書」という科目で、イエス・キリストがしたことや、歴史について学んだ。私が最も心に残っている聖書の箇所は、創世記の1章27節の「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女を創造された。」である。人類はどのようにしてできたのかという疑問に答えてくれる文だと思つた。キリスト教信者たちは、神がわれわれを創り上げたと思ひ、それが今でも言い伝えられ、イエス・キリストにお祈りを捧げているのだと思つた。そういつた「神」という存在を信じることで、われわれに何かいいことが降ってくるのではないかと思っているのではないかと考えた。実際に、高校の時の礼拝で、災いが降ってきて、どうしようも無い時、神を信じてもおかげで、少しづつでも回復していき、最後は物事が成功して良い人生を歩めたという人の話を聞いた。私は、神は私たちを見守っているのだと思つた。これから人生を歩むわけだが、苦しい時は、聖書の言葉を見てみようと思つた。

礼拝感想文

創立記念礼拝に参加して

社会福祉学部

社会福祉学科

一年 長谷川 蘭

6月21日の木曜日に弘前学院大学創立記念礼拝が行われた。この日は礼拝堂ではなく体育館で行われた。このようにみんなが揃って礼拝をするのは初めてだったので少し緊張した。最初はいつものとおり始まって賛美歌を歌い、主の祈りをした。その後、青山学院大学の先生が来てお話をされた。弘前学院大学と青山学院大学にどのような関係があるのかと思っただが、この2つの大学に共通しているのは、本多庸一さんという方である。本多庸一先生は、津軽藩弘前市出身のキリスト者であり、青山学院大学の二代目院長として、またメソ

ジスト教会初代監督として知られ、新島襄、内村鑑三、新渡戸稲造などと並ぶ日本におけるキリスト教主義教育の先駆者だった。そして一八八六年(明治19年)に青森県における最初の女子普通教育学校として、本多庸一先生によって弘前学院が創設された。

この日は青山学院大学の第14代院長の梅津順一先生が来られた。梅津順一先生は弘前学院大学の創立を記念している様々なことを話された。本多庸一先生のおかげで今こうして梅津順一先生のお話を聞いているのだと思うと同時に本当にすごい人なのだと思う。また、弘前学院大学と青山学院大学にこのような関係があるとは思っていなかった。今回の創立記念礼拝を通して知ることが出来てよかった。

今まで小学校・中学校・高校の創立記念日には特に何もしてこなかったの

で、大学に入り始めて生徒みんなが創立を祝うということをした。「礼拝」も大学に入って初めて知った。高校がキリスト教の私立高校の人は礼拝を捧げたことがあるようだが、私は公立高校だったのでやったことはもちろん見たこともなかった。弘前学院大学に入学してから毎週木曜日に礼拝があるが、宗教を信仰することというのはこういうことなのだろうと思った。宗教を信仰するには必ず理由がある。何の理由もなしにただみんながやっているから自分もやっているのではなく、人それぞれの理由があって信仰しているのだと改めて思った。

私はどちらかといえば宗教を信仰していないし、神様などというものの存在も信じていない。日本で宗教は嫌だと思う人も多いと思うが、自ら進んで信仰しているとはいえないと思う。特に仏教だ

からといって何かをするわけでもないし、キリスト教のように礼拝をするわけでもない。日本人にとつての神とは神社に祀られているものだと考えている人が多いと思う。だからといって毎週決められた日時にお参りする人はほとんどいないのではないだろうか。このことから、キリスト教だけでなく、その他の宗教を信仰している人は忠誠心が高く神のことをどれだけ大事に思っているかが分かったような気がする。

もしこの大学がキリスト教でなければ、この先一生キリスト教に関わることもないだろうし、礼拝することもなかったと思う。大学に入って礼拝をすることによって、色々な文化を知ることが出来たと思う。なぜそのような人たちがキリスト教を信仰するようになったのかもつと知ってみたいと思った。自分がキリスト教を信仰するようになる

ことは今の段階ではないと思うが、信仰している人たちを差別するのはなく認めてあげることが大事だと思った。日本でキリスト教を信仰している人も多くはないと思うけど、その人たちもまた、何かしらの理由があって神イエスを信じているのだと思った。誰かを信じられるのはとてもいいことだと思った。信じることでその人に幸せが訪れるなら、アーメン。



お知らせ

後期宗教部行事

十一月

十五日(木)10時30分

秋の特別礼拝

(場所・体育館)

十二月

十三日(木)16時

クリスマス礼拝

(場所 礼拝堂)

十三日(木)18時30分

クリスマス

音楽の夕べ

(場所 礼拝堂)

三月

一日(金)10時30分

世界祈禱日礼拝

(場所 礼拝堂)



編集後記

今年、大阪府北部地震

や西日本豪雨や猛暑によつ

て多くの方々が亡くなら

れましたが、亡くなられ

た方々の魂に神の慰めと

平安がありますようにお

祈り致します。我らがこ

のように毎日生かされて

いることはただの偶然で

はなく、神によつて生か

されていると思います。

与えられている職務の生

活をする中で、この度、

また「たてごと」を発行

することにしました。

この「たてごと」を読む

ことによつて少しでも多

くの人たちが励まされ、

生きる知恵と希望、そし

て神に対する信頼をもつ

ことができるように祈り

ます。(編集長 楊尚眞)

まだ残っている地域も

多いのかもしれないが、

これまで住んだところで

は行われておらず、弘前

に来て初めて見たのがお

盆の迎え火・送り火であ
る。道端で火を焚くのは
都市部では難しいだろう
と思われ、弘前でも比較
的交通量の少ない場所
そばで見張りながら行わ
れているようである。

盆踊りも、子供の頃は
小さな児童公園などでも
行われていたのに最近
見ることがない。そう思っ
ていたら、この頃はダン
シングヒーローやボン・
ジョヴィで盆踊りを踊る
のだそうである。廃れゆ
くように見える風習も形
を変えて生き残っていく
のかもしれないと思つた
夏の終わりである。

毎年のように、災害が
続くようになってまいり
ました。すでに、「観測
史上初めて」や「過去に
例のない」という言葉が、
単なる一般的な形容にさ
えなってきた感がある昨
今です。

このような災害がある
たびに、教会は、そのネッ
トワークを使って、地域

に密着した支援を行おう
と動き続けました。阪神
大震災から始まり、東日
本大震災、熊本、今回の
水害と。こうした活動
こそ、本当にキリスト教の
想いが生かされる場です。
そして、地域に密着した
活動こそ、教会が担うべ
き役割です。これは、こ
の2千年のキリスト教の
歴史の中で、変わらずに
続けてきたものです。

全国の津々浦々に教会
があり、相互にネットワー
クを作ることができ、し
かも、世界にもつなぐこ
とができるという、教会
だけが持つ素晴らしさが
あります。そして、その
ネットワークの中には、
私たちミッションの学校
も入っております。この
ネットワークの一端とし
て、私たちも働いていき
たいと考えております。

これから、教会と共に、
私たち弘前学院大学も進
んでいきたいと考えてお
ります。(柘植秀通)
看護師から教員となり、

半年が過ぎようとしてい
る。自身は看護学実習
のため、礼拝にほとんど
参加できていないのが現
状であるが、何度か参加
の機会があった。礼拝で
は毎回様々な説教がされ、
その中に時事内容が盛り
込まれている。私を含め
礼拝になじみのない方も
多いであろうし、内容を
理解することは難しいこ
ともあると思うが、時事
内容に目を向け、そこか
ら考える機会になると捉
えることもできる。考え
方は各々だが、各自の捉
え方で礼拝に参加し、一
助になればと思つた。

今年も災害の多い年
ですね。大阪の地震から、
台風が過ぎた矢先に、北
海道の大震災と、被災さ
れた皆様に心よりお見舞
い申し上げると共に、一
日も早い復興をお祈りい
たします。日常の生活が
戻り、心の平安が一日で
も早く来ますように祈り
ます。(大坊幹子)